

言語の規範性と私的言語のジレンマ——標準語批判を越えて

守田 貴弘*

第一節—方言の抑圧と標準語批判

撲滅、再発見、共存。唐突かもしれないが、これは日本において方言が辿ったとされる三つの時期を指している（佐藤一九九六参照¹⁾）。これらの各時期に関する経緯については先行研究に詳しい説明があるため、ここで詳細な歴史を追うことはしない。本稿の目的のためには、全体的な経緯として、方言が抑圧の対象となったという事実と、その対立言語である標準語あるいは標準語政策を問題視するときの根拠を抑えておく必要がある。

近代に入ってから、標準語を制定して全国共通の教育を行う必要性が叫ばれるようになると、方言は抑圧の対象となった。国民国家の統合と言語の標準化は表裏一体であり、教育現場において方言が撲滅の対象であった時期は確かに存在する。その後、比較言語学的手法を方言学に持ち込むことで、方言は日本語の統合性を通時的に保証するツールとして再発見されていく。一般に「古語は方言に残る」と言われているように、方言には中央で消失してしまった語や活用体系が残っており、時間を超えて広がる日本語の一体性を保証するために方言が再発見され、利用されてきたという側面があり、

この試みは現在も続けられている。³⁾このように、日本語は、通時的には方言を利用し、時間を遡れば同源に辿りつくことを根拠として一体性を作り上げ、共時的には（当時の）領土内で同じ言語を強制することで一体性を保証しようとしてきたと言えることができる（安田一九九九参照）。

現在は標準語と方言の共存期だと考えられている。いつから共存が始まったのかという問いに正確に答えることはできないが、一九九五年にまとめられた第二〇期国語審議会答申「新しい時代に応じた国語施策について」では、方言は次のような地位を与えられていることから、それ以前に、限定された形で方言の使用は一般に受け入れられていたと見ることができる。

地域の文化を伝え、地域の豊かな人間関係を担うものであり、美しく豊かな言葉の一要素として位置付けることができる。「方言の尊重」とは、国民が全国の方言それぞれの価値を認識し、これらを尊重することにはかならない。

この部分では、方言が尊重される方向にあることが明確に述べられている。国の方針として方言撲滅から逆方向に舵を切り、地域変種

を尊重する態度自体は、言語権という観点から評価することができ
るかもしれない。⁽⁴⁾しかしその一方で、方言は「言語生活を生き生き
とさせる豊かな言葉ではあるが、全国的なコミュニケーションの基
本は共通語であ」り、「今後も両者が役割を分担しつつ共存してい
くことが望ましい姿であろう」と、共通語と方言は明確に異なる役
割を付与されてもいる。つまり、この答申は、共存というよりも、
明らかに異なる役割を担った言語変種による二重言語状態を推奨す
るものとして読むこともできる。社会言語学の用語を使うならば、
共通語を日変種とし、地域方言をし変種として截然と分けることを
認めた、ある意味では画期的な答申と考えることもできる。⁽⁵⁾

現在の共存状態は、言語学者からは方言の復権として好意的に語
られることがある（たとえば井上二〇〇七）。これに対し、安田敏
朗は「共存」状態を好意的に捉える言語学者に批判的である。確か
に、方言の存在が許されるのは地方に限定され、全国共通の言語と
しては標準語、あるいは、そのほとんど単なる言い換えに過ぎない
「共通語」が使われるということであり、「過去の抑圧から現在の尊
重へ」というように方言が復権したという見方はナイーブに過ぎる
のではないかと安田の批判は的を射ている。⁽⁶⁾まさに、標準語に
よる方言の「排除と包摂」（誰もがいつでも自由に使える言語とし
ては方言を許容しないという方向では排除であり、日本語の一体性
を保証するツールとして、あるいは限定的に存在が許された言語と
して標準語に取り込まれているという点では包摂されているという
見方。安田一九九九参照）の構造そのままである。

詳しくは次節に譲るが、方言が辿ったこのような流れに対し、対

立概念である標準語や国語、あるいは日本語といった、制度として
定められた言語に対して批判の目が向けられている。抑圧装置とし
ての標準語という批判である。さらに、標準語を批判する論者は、
方言の抑圧や排除を問題視するだけでなく、言語と国家の結びつ
きを推進した言語学者や、⁽⁷⁾このような状況を生み出す母体となった
言語学という学問自体にも批判の目を向けている。その一方で、議
論そのものは非常に多様ではあるものの、ほとんどの論者が「国
語」あるいは「標準語」の仮想性や規範性を攻撃している点で一致
していると見ることもできる。後述するように、標準語は理想とし
て提示された言語体系であり、その意味では「話し手の存在しない
言語」であるため、仮想性を批判し、提示された理想が強制力を発
揮することを問題視することもできる。

本論文は、まさにこの仮想性や規範性を根拠とした標準語批判の
妥当性を考察対象として取り上げる。方言の抑圧や植民地での言語
の剥奪は是認できるものではなく、抑圧する側にあった標準語に批
判の目が向けられるのは当然かもしれない。しかし、言語の仮想性
や規範性は、批判し、解体することができものなのだろうか。標
準語というものはそもそも仮想性しか持ち得ないものかもしれない
し、言語というものは実体のない規範の体系としてしか存在できな
いかもしれない。この問いに答えるためには、言語そのものの性
質を検討した上で、これまでの批判を再検討する必要がある。本稿
の目的はこの点を探求することであり、方言を抑圧した標準語その
ものに対する批判、標準語を考案し、その普及に関わった言語学者
あるいは言語学という学問自体への批判に、言語学的あるいは哲学

的な見地から応答することである。

本論に入る前に、なぜ標準語批判に応答するに至ったのか、標準語に対する、標準語政策を批判する論者と一般学生の認識の違いを如実に示す個人的なエピソードを記して序章を閉じることにした。

筆者は社会言語学の授業を担当することがあり、授業の中で、一般的な概念や言語学的分析の他に、明治・大正期から戦後にかけて、誰がどのように、なぜ標準語を制定していったのか、その流れの中で、国内の言語に何が生じたのかというように、「言語社会的」なテーマを概略的に論じることがある。⁽⁸⁾そして、学期末の試験で「日本における標準語政策の流れを説明するとともに、この政策の妥当性について論じよ」という問題を出すと、学生の回答はほぼ決まって次のようになる。

富国強兵の時代であり、全国共通の教育が必要とされていた時期に、全国で通用する言語がなかったというのはやはり不便である。方言の抑圧につながってしまったのは問題であり、今後、方言も含めた地域文化の撲滅につながるようなことがあつてはならないが、標準語政策自体は必要ではないだろうか。標準語があるからこそ、今では全国的に共通の情報を行き渡らせることができており、その標準語を広めようとすること自体に問題があるとは思えない。

ほとんどの学生が関東出身者であり、今の時代にあつては自分の

ことを抑圧されたという意識を持たないものが大半だという事情もあるだろう。それでも、彼らが「便利なもの」として標準語を肯定し、方言も今後は大事にして文化を絶やすことがあつてはならないという意識を持っていることが分かる。地方出身者の中には、「標準語で教育がなされていたからこそ、今こうして大学入学のために上京してきても問題なく生活できている」と、かなり積極的に標準語を肯定する者もいる。いずれにせよ、「情報が共有されることの重要性」と「利便性」を重視していると見ることができ、上述した一九九五年の国語審議会答申に近い認識となつている。「共存」を歓迎する社会言語学者に近いということもできそうだが、そもそも「共存状態」に意識的ではなく、情報を共有するためには標準語は当然必要であると捉えている点で、専門家とは異なる見方をしているようである。

つまり、方言と標準語の地位に関して、楽観的な社会言語学者、批判的な言語社会学者、そして一般学生の間で見方が異なつている。現在は、社会言語学者にとっては方言が復権した「共存期」であり、言語社会学者にとっては排除と包摂の構造が完成に近づき、安易に方言が復権したとは呼べない時期である。そして、このような専門的な議論の外にいる学生は、標準語が抑圧の手段や自分のことを排除する装置だという意識や、逆に方言が尊重されているという意識もないままに、共存状態をそれと意識することなく、便利なツールとして標準語を受け入れているように見える。言語を研究対象とし、文法の記述や体系の一貫した説明に興味を持つ当時の（そして現在の）言語学者と、言語学者が果たした政治的役割を指

弾する言語社会学者、そしてそのような専門性の埒外にある一般学生、どの見方が言語の捉え方として妥当なのだろうか。

本論文の目的は、言語には、方言であれ標準語であれ、どのようなレベルであっても必ず規範性が存在し、規範性のない言語は言語として機能できないことを示すことによつて、標準語政策に対する批判が見逃している問題を明らかにすることにある。またそれは、個々の発話を抽象化して得られる仮想的な体系を作り上げるものとして、言語学という学問自体に向けられる批判に対して、言語学あるいは哲学から一定の回答を示すことにもなる。

次節では、標準語政策批判を素描するとともに、本論文が中心的な問題として扱う「言語の仮想性」がどのようにに標準語批判、国語批判、日本語批判の文脈に現れているのか概観していく。主に、仮想性や、仮想的であるからこそ導き出される標準語の規範性を言語学という学問との関係で論じた批判を、言語の根本的な性質という視点から検討する。その中で、音韻論や統語論など、さまざまなレベルにおいて仮想的な体系を想定することの是非など、現在の言語学を可能にしている基本方法の妥当性も問うことになる。次に、第三節では、標準語政策を批判し、規範性を拒否する論者が結論として持ち出してくる「自分の言葉」というものが果たして成立するものなのかどうか、ワイトゲンシュタインの私的言語論との関係で論じる。私的言語によつて標準語を拒否し、仮想性や規範性を乗り越えることは果たして可能なのかどうかということが問題となる。結論では、従来の国語批判、標準語批判に欠けていた視点を明らかにし、さらに言語は規範性を免れないこと、言語の所有者を問うと

いう問いの在り方そのものが、そもそも問いとして成立しえないことを、第三節までの議論を踏まえて主張するとともに、規範性の所在を問い、真の共通語を構築するためのアイデアを示すことにしたい。

第二節 標準語批判論に対する言語学的応答

二・一 標準語成立の概略的経緯とその批判

標準語の成立過程については、イ(一九九六)、安田(一九九九、二〇〇六)、滝浦(二〇一三)などで詳しい経緯が説明されている。ここでは、標準語成立の全体的な流れを抑え、その流れの中で問題視されている批判対象を簡単に分類した上で、本論文で扱う問題を限定していくことにしたい。

まず、先行研究でも繰り返し述べられていることもあるが、標準語は自然に発生したものではない。近代以前の幕藩体制下では、全国で通じる日本語はまだ存在しておらず、言語はおろか、文字も文体も統一されてはいなかった。少し説明を加えておくなら、多数の変体仮名が使われ、話し言葉と書き言葉の乖離も大きく、文章を書くためには漢文の知識が必須という状況である。標準語政策の重要な柱として国語国字問題(文字の整備)や言文一致(文体の整備)が取り沙汰されるのはそのためである。日清戦争開戦の頃から二〇世紀の初頭にかけて、本格的に文字や文体が統一され、標準語が教育制度の中に組み込まれていくようになる。事の性質上、いつが標準語政策の出発点であり到達点なのか明確に述べることは

はできない。ひとまずは、上田万年による一連の講演などに続く、一九〇〇年の小学校令改正による漢字・仮名の整備や、一九〇二年の国語調査委員会の設置などを標準語政策黎明期におけるランドマークとして考えることができるだろう。到達点は未だ見えておらず、現在でも続いているというのが正しい見方かもしれない。

では、この標準語政策の中で、いったい何が批判されているのだろうか。標準語政策に対する批判的論考は非常に多く、扱われているテーマも幅広いため、ここで網羅することはできないが、そのほとんどが次の四点のいずれかを主題としていると考えることができるだろう。

一、ナショナリズムとしての国語の成立

一、植民地支配、皇民化政策における国語教育として現地の言語を奪った経緯

一、方言弾圧としての国内問題

一、仮想のものに過ぎない標準語が強制力を持つに至ったこと

国語の誕生あるいは標準語の成立に政治臭がつきまといているのは確かである。上田万年による講演「国語と国家と」（一八九四年）、「標準語に就きて」（一八九五年）などは、国威発揚につながる非常に刺激的な表現に満ちている。たとえば、国民同士を結びつける紐帯として、日本語を「日本人の精神的血液なり」と表現した点などが多くの著作で問題視されている（イ一九九六、川口・角田二〇一〇、安田一九九九、二〇〇六、滝浦二〇一三）。その他にも、

上田は、「なまけ深き母」であり、「我々を膝の上にむかえ、国民としての思考や感動を教えてくれる」ものとして国語を描くなど、メタファーを駆使して、国民であるからには自然に国語を尊重するようになるといったことも主張している。当時はまだ存在していなかった標準語があたかも自然物として存在しているかのように語られているのも特徴的である。（同じ講演の中で「標準語の整備が急務だ」と主張しているにも関わらず。）このように、日本が国民国家として成立するために必要な手段として言語が使われたというナショナリスティックな側面が、まずは主要な批判対象として取り上げられることが多い。

二点目は台湾や朝鮮における当時の政策である。現在、これらの国で日本語が教授されていることを指して「日本語教育」という呼び名が使われるのが普通である。しかし、台湾では一八九五年からの五一年間、朝鮮では一九一〇年からの三六年間、「国語」教育が行われていた。国語教育は日本人を対象としたものであり、日本語教育は外国人を対象としたものである。植民地化されたことにより「国語」教育となったわけだが、この時期に実際にどのような教育が行われ、どのような状況をもたらしたのか、詳しくはイ（一九九六）や陳（二〇一〇）、安田（二〇一一）等を参照したい。個々の事情はさて置くとしても、母語を奪う存在として日本語があり、日本語が彼の地で特権的な地位を占めていたことが報告されている。また、国内的にも標準語が浸透していない段階で植民地での「国語」教育が必要となったため、植民地政策によって国内の標準語の整備が急務とされ、三点目の国内問題にも拍車がかけられ

たという側面もある。

三点目は国内問題であり、内地での標準語の強制による方言剥奪が問題となる。近代の日本では、意思疎通もままならないほどに方言差が大きく、「同じ国民なのに話ができない」ことを嘆く論調が少なからずあったようである。その中で、沖縄における方言札（罰札）に代表されるように、罰則を伴う方言矯正教育も各地で行われていたことが明らかとなっている（柴田一九五八）。これらは、排除すべき対象として方言が捉えられていた証左に他ならない。国内的な方言の抑圧は必ずしも近代に限定されるのではなく、戦後になつてからも方言あるいは方言話者に対する差別は続いており、現在も残っているという見方も十分に可能だと思われる。日本ではまだ浸透しているとは言いが、言語権という考え方からは、人の言語を奪っている点で二点目と三点目は共通の問題を抱えていると言うことができる。

四点目は標準語の仮想性である。上記三点すべての支柱ともなっている点であり、本論文が中心的に論じる問題である。国民統合の道具立てとして言語を使おうというとき、標準語は上田本人が述べているように「方言を超越した理想のもの」であつて、決して話し手が実在する言語ではなかった。あくまで理想として思い描かれた体系として標準語は存在しており、標準語母語話者といった人は存在しない^⑩。そして、理想を国定読本のような形で実現することによって方言話者に強制し、正しい日本語として植民地で教育することが可能になるという構造を持っている点で、「実在しないものが強制力を持つ」という仕組みとなっている。標準語がそもそも仮想

的な体系であり、その体系から発せられる規範性もまた仮構に過ぎないという論調はいくつかの論考で見受けられる。その内実を詳しく見ていくことにしよう。

二・二 標準語の仮想性あるいは規範性に対する批判

標準語の仮想性は、近代標準語政策の最も中心にいた上田万年の講演「標準語に就きて」の中でも次のような箇所に明確に現れている。

猶一層簡単にいへば標準語とは一國內に模範として用ゐらる、言語をいふ。しかれども、言語は何人も知ることく、實在上には決して一致したがき者なれば、此上に一標準を規定すると云へば、畢竟抽象的に其理想を談すること、思はざるべからず。而して此事はかの複雑極まる法律的生活の、萬般の顯象を規定する法典編纂の事業と均しく、時世と共に其理想の變遷しゆく時には、従いて又其標準を轉移しゆくべきものとす。（中略）一度理想の言語が固立したる曉には、それは實在に於けるが如く、非常に轉變をなす自由を有せざるものなれば、従いて其規則を確守し、其統一を實行しゆく上に、極めて勢力ある者なり。（中略）標準語は理想的の者にはあれども、其初に遡りて論ずれば、もとこれ一個の方言たりしものにて、其方言が種々の人工的彫琢を蒙りて、遂に超絶的地位に達し、全時に其信用と其尊敬とを高め來りて、漸く他の方言をも統括する程の大勢力を得たるものなり。

「模範」「抽象的」「理想」という語が使われているように、標準語の必要性が日本で初めて訴えられたときから既に、標準語は実在性のないものとして考案されていることが分かる。また、「人工的彫琢」という言い方に現れているように、標準語が人為的に創られるものであることも明言されている。その一方で、理想の体系がいつたん実現してしまえば、あたかも実在しているかのように拘束力を持つことも自覚的に述べられている。他の箇所では、もし言語の変化を免れえないときにも、標準語はその変化を「秩序的になさしむるだけの制限力を有す」とも述べており、「言語發達上の一大要素たる保守力を代表する者」と位置づけられている。

母語話者の存在しない理想的な体系であったとしても、守るべき規範として、できるだけそこに近づけることが望ましく、規範として機能することを期待されて標準語は誕生したと見ることができる。現在の標準語が持つ機能を見越して講演しているかのようである。現在でも、ある言葉遣いが正しいのか間違っているのかという判断は、標準語という規範に照らして行われており、諺の意味の変化などについても、文化庁「国語に関する世論調査」が行われるたびに「正しく意味を答えられた割合」が公表され、意味変化にブレーキをかけようとしている。上田の構想通り、標準語は規範として機能している現実がここにはある。

この仮想性あるいは規範性に対する批判として、まず、川口・角田(二〇〇五、二〇一〇)を挙げることができる。彼らの研究は、「日本語と呼べるものは存在しない。あるとしても、それは虚構である」という主張に貫かれている。

川口・角田は、言語は変わり続け、常に揺れ動いているものであるため、正しい日本語や乱れた国語、あるいは純粋な日本語といったものは存在しないと主張する。その主張を元に、正しい日本語や純粋な国語といったものが想定され、それらが安易に「祖国とは国語だ」といった形のナショナリズムに結びついていく風潮や、古い日本語を美しいものとして崇める懷古趣味などを批判していく。

これらの主張内容自体は間違っていない。言語の乱れと呼ばれているものが通時的な変化である可能性もあり、そのような変化に對して規範を振り翳して正しさを追究しても無意味であり、いつの時代の日本語が良かったのか、正しかったのかと検討するのも不毛な議論である。この意味では、規範はゆるやかなものであり、ことさらに規範を求めることや、権力者が人工的な彫琢などを施そうとする点に問題があるという批判がなされても、ひとまずは受け入れることができる。

標準語や国語と呼ばれるものの仮想的な規範性を批判する彼らの姿勢は『広辞苑』(岩波書店)や『日本国語大辞典』(小学館)での「国語」の定義を次のように変更している点に鮮明に現れている。

国語①その国において公的なものとされている言語。その国の公用語。自国の言語。(『広辞苑』)

国語①ある一国における共通語または公用語。(『日本国語大辞典』)

国語

国家の政治権力を背景に国家語として制定される言語。共通語や公用語とは本来別の概念である。日本では、明治から大正期に「標準語」として人為的に創出され、その内容や実質は日本語に比してきわめて限定された狭いものであるが、従来の「慣わし」として、拡大解釈され、日本語と等置されてきた。時には、借用によらない日本固有の語、純粋な和語、「やまとことば」などとも等置されてきたが、そのような言語の存在は架空の幻想に過ぎない（強調は著者、川口・角田二〇一〇…一〇八）。

上で引用した上田の講演からも明らかであるように、確かに標準語は人為的に創り出されたものであり、純粋な和語のみからなる日本語なども幻想である。しかし、だからといって、なぜ標準語の仮想性や規範性をここまで拒否しなければならないのだろうか。そして、後に見るように、言語の規範性を拒否することは、果たして可能なのだろうかという疑問も生じる。

結論を先取りして述べておくならば、この問いには「仮想性や規範性を拒否することはできない」と答えることになる。言語学的にも哲学的にも、規範がなければ言語が言語でありえないからである。

ここではさらに、標準語に対して、言語学という学問との関係でその仮想性を批判している対談を検討しておこう。

小森…音韻を追究する一見アカデミックに見え、政治とは無縁

に見えるところに最も青年文法学派の政治性があつたというところが非常に重要だと思います。

イ…国民をつくるときにいろんな変種を切り取って、そこで一つの権力が国語をつくることによって、国民という目に見えないものに、国語という具体的な顔をつくるが必要になりますが、それをつくるときに文献学ではなくて、今話していることばが大事なんだよということを土台とするんです。

小森…なるほど、そこに音韻学の政治性があるわけですね。つまり実際に話されている言語はさまざまに異なった声によって話されているし、その声によって発話されている言語を実際に構成している音の単位も個人個人で偏差があるし、そこに国民の声なるものを見いだすことはできない。有るのは差異だけ、ということですね。ところが音韻ということに昇華して、まさにアカデミックな研究の対象となる一つの声を、緻密な研究によって積み重ねて構成していく、その一瞬一瞬において「国民の声」がその場で形成されていく、そういう学問なわけですね（イ・小森一九九八）。

ここで語られている、文献学から実際の発話へという研究対象の移行が十九世紀から二十世紀にかけて起こったのは事実である。また、音声という面でも、「実際に話されている言語はさまざまに異なった声」によって話されているのも間違いない。音声学的には、二つとして同じ音は存在しないと切り切れることもできる。声の高低や母音の長さの微妙な違い、子音を調音するときの摩擦のかけ方や

破裂の強度など、細かな点まで考慮すれば、すべての音はそれぞれ異なっており、同一の話者であっても、音声解析ソフトを通したときに完全に同一だと認定できる音声を再生することは不可能である。この点では小森の発言はまったく正しい。音韻論でのこのような音の扱いを小森は「音韻ということに昇華」と表現している。昇華された音は抽象的な音の記憶のようなものであり、これは音韻論でいうところの「音素」のことであると了解できる。

この音素の捉え方をめぐって、言語学と小森の間に大きな違いがある。言語学的には、音素とは意味の違いを生み出す音の弁別的特徴によって抽出されるものであり、意味の違いに参与しない音の特徴を捨象したものとして定義される。音韻論は、決して「国民の声」を形成するといった政治性を目的としているわけではないことに、まずは注意する必要がある。先に列挙した音の差異を生み出す要因の一つ一つに注目しては、形式(＝音声)と意味が結びついた言語記号の分析に不都合が生じるため、意味の区別に関係しない音の特徴を捨象しているに過ぎない。小森らは、言語学者の意識していない、言語学という学問に内在する政治性を指摘しているだけだと読むこともできる。しかし、異なる音をすべてそのまま扱うことが難しく、そのため類似した音のカテゴリー化を行う必要があるという科学的要請を完全に無視することはできないだろう。(言語学が科学であろうとすること自体を批判することも可能であり、その批判には言語学という学問が向き合っていかなければならないものだと思う。)。

この対論の中で抜け落ちている最も重要な点は、なぜ、厳密には

異なる音であっても、当該言語の話者であれば「同じ音」として認識されているのかという視点である。つまり、音韻論が「昇華」などしなくても、人は誰でも「同じ音」と「違う音」を区別しているのではないかという視点である。もし、すべての音の違いを「有る」のは差異だけ」として認識していれば、肝心な意味の伝達に大きな支障を来すことになることは容易に想像できるだろう。すべてが別々の音であると認識するのであれば、その個々の音がそれぞれ異なった意味と結びつきうるからである。たとえば、四二〇ヘルツで発音された「アカ」と四二五ヘルツの「アカ」は、五ヘルツの違いを認識するのは簡単ではないが、それでも高さが違うため別々の音である。そして、別々の音がそれぞれ独立した意味を持つということは、ここで四二〇ヘルツの「アカ」は《赤》を意味し、四二五ヘルツの「アカ」は《ペンギン》を意味するといった言語体系が存在する、という事態を受け入れることを意味する。^① そんな荒唐無稽な話はないと思われそうだが、高さの違う音について「別々の音だが同じ意味を表している」という認識を得るためには、まず「別々の音だが、意味の違いをもたらすような違いではなく、無視できる違いである」という認識が必要になる。つまり、意味の同一性に基づいて別々の音を「同じ」ものとしてまとめる手続である。そのため、音韻論では「ある言語において」「意味の違いを生み出す」という基準によって音素が定義されているのである。

この理解は私たちの素朴な直観にも合致している。また、「ある言語において」という基準が必要となることも、たとえば日本人にとって「r」の区別が難しいのはこれらが日本語において音素では

ないため区別する必要がないからであり、声門摩擦音の発音が一般のフランス人に難しいのは、そもそもそのような音がフランス語にないからだという事実からも了解できる。ある言語を共有している者同士に知覚可能な特徴によって音を聞き分けるということは誰もがやっていることであり、意味の区別に関係しない音については聞き流される。音の高低や男女の声質の違いなども意味をなす差異だと捉えることはできない。そのため無視されているのである。この「同じ音」と「違う音」の聞き分けは、音素として定式化したのは言語学者だが、言語学者が作り出した仮構というわけではない。音韻論の「所業」のように位置づけるのは、言語の本質に反している。

同様の問題点は角田・川口の論考にも該当する。小森とイが言語学という学問に内在する思想的問題として虚構性、抽象性あるいは匿名性を批判しているのに対し、角田・川口においては、標準語という規範が設定されて拘束力を持っている点が主たる問題とされているという違いはある。だが、行き着く先が「個人の声を奪う」とであれ、「個人の文法に対する規範となる」とであれ、結論としてはさほど違いがあるようには見えない。個人に介入することを問題視している点では同じである。

以上のように、批判の方向性や根拠の違いとはいえ、仮想性を問題視する論調は確かにある。意味の区別に参与しない音の特徴は捨象するという点に、確かに個人の声を匿名化する機能がある。音に伴う「その人らしさ」という言い方をしてもいいだろう。だが、音韻論の目的は「個性を剥奪する」ことではない。

これらの論考で批判されている規範性は、音韻論や言語学という

学問自体が抱えた政治的な問題だとすることはできない。むしろ、言語というシステムに内在する特徴のように思われる。もう少し、現代の言語学の成立過程と、言語そのものの性質を確認した上で規範性の是非を検討してみる必要があるだろう。言語学者が個性を剥ぎ取ることに無神経であるのか、それとも、仮想的な規範性が言語を言語として成立させる本質なのかという問いに、言語学的に明確に答えておく必要がある。

二・三 言語学の成立と仮想性、規範性

前述のように、人はみな違う音声操ることと言語を使用しており、厳密には、同一人物であつても同一の音声を二回出すことはほとんど不可能である。それにも関わらず、「同じ音」や「同じ語」、「同じ意味」や「同じ文」というように、何かと何かが同じだと判断している。そして、そう判断できるからこそ、狙った通りに意味を伝えることができるとも言える。たとえば、「アキ」という音声があつたとする。アクセントの付け方によっては《秋》にも《空き》にもなるが、誰がどのような声色で発音しよう、「イ」の音が無声化されていようと、《駅》や《息》、《雨季》といった意味を伝えることはない。日本語では、「ア」「イ」「エ」「ウ」は別の音として機能し、アクセントも弁別的に作用するが、音の高さや男性の声と女性の声といった区別は弁別的ではないからである。このような手続きを経て、日本語における母音の音素が確定される。言い方によっては、音素とは、実際に発音される音のさまざまな特徴を取り去り、弁別的な特徴のみを抽出した音カテゴリーとして存在するため、それ自

体に実在性はないと言うこともできる。音の記憶のようなものであり、その記憶との類似性によって、実際の音がどのような意味を持つのか判断されている。その意味では、確かに「昇華」されているのかもしれないが、いたずらに抽象化しているわけではなく、意味の違いを生み出すかどうかという基準に基づいてカテゴリー化がなされていることを忘れてはならない。

音素だけではなく、文のレベルでも、実現形と、その根底にあると考えられる統語論が区別されている。文の場合、実際には言い淀みや言い差し、繰り返しなどによって不完全な文が発せられることが多い。それでも、私たちは相手の伝えようとする内容を理解することができ、伝えたい内容を伝えることができる。語の並べ方に関する規則を守っている限り、実際の発話に一定の揺らぎがあつたとしても言語のコミュニケーション機能が失われることはない。音素と同様に、実現形の背後に規範的な規則にしたがつた文というものがあると考えられている。このように、言語学はさまざまなレベルにおいて、その実在性が疑われる抽象的（で完全）な体系を想定して研究が行われている。ソシユールの言うラングである。

ラングとは、パロールの対立概念である。パロールは言語使用者個人に帰属する一回一回の発話を指すが、ラングはその発話を可能とする記号の体系の総体であり、社会に帰属するものだと考えられている。実在性を問うならば、ラングは実在するものではなく、あくまで抽象的な記号の体系として想定されているものと言うことができる。先行研究において批判の対象となつている標準語や国語、日本語と同様、仮想的なものであり、そこを逸脱すると正しく意味

が伝わらないという意味では規範と呼んでも差し支えない。

国によって定められた標準語や国語が人工的な規範を備えているのとはほとんど並行的に、自然言語にも規範はある。そしてこの規範性は、言語学者が学問的に生み出した仮構などではない。音声のときと同じように、パロールしか実在し得ないのは確かだが、では、なぜ同じパロールがあるということが私たちに認識でき、聞いたことのないまったく新しい文の意味が理解できるのだろうか。試みに、「お腹が空いた」「お腹が空いた」と二回、唱えてみて欲しい。その二回の発話が同じ音から構成され、同じ意味を伝達していることが理解できるのはなぜなのか。日本語において意味の違いを生み出す音の特徴とそうではない特徴、語の並べ方に関する破つてはならない規則などを知っているからであり、その総体が仮にラングと呼ばれているだけである。ラングと呼ばないのであれば、標準語と言つても変種と言つても、場合によっては方言と呼んでもいいだろう。これらの違いは所詮、通用範囲の違いを反映しているだけである。どのようなレベルであれ、どのような通用範囲であれ、一つの規範として機能する体系があるからこそ、私にとつての「お腹が空いた」と、あなたにとつての「お腹が空いた」が（ほぼ）同じ意味を伝達していることが理解できるはずである。当該言語を使っている者すべてが従っている規則がなければ、このような伝達行為は不可能である¹²⁾。

このように、言語学者が手を下すまでもなく、言語が言語として機能するためには、必ず規範性がついてまわると言つて良い。ソシユールがラング、パロール、ランガイジュという区別を持ち出す

以前から、個別発話と、その背後にあると考えられる集合的な規範意識は区別されていたはずである。そうでなければ、人の言い間違いを指摘するということもできず、さらには、自分でも正しい文とそうではない文の区別もできないことになる。適格な文と非文という言い方に語弊があるのであれば、人に意味を伝えられる音声と伝えられない音声の区別と言ってもいい。ラングがなければ、あるいは標準語や日本語と呼びならわされているものがなければ、人の言い間違いを指摘することも原理的にできない。誰もが自由に音声を発する権利があり、その音声にどのような意味を結びつけるのも自由であるため、間違いを正すことはできないのである。同時に、当然だが、伝えたい意味を伝えることもできなくなる¹³。

記号を介してコミュニケーションをとるためには、恣意的な記号をどのように使うのかということに関して合意が必要となる。そのため、社会的な実体としてラングは定義されている。合意という行為の性質上、言語に関わる合意は一人で行うことはできず、発信者と受信者を含む、二人以上の参加者からなる社会が必要となるのは自明だろう。言語は成立の瞬間から社会的契約物でしかありえず、社会的合意が規範として機能することに何ら不思議な点はない。

第三節 私的言語は規範性を乗り越えられるのか

三・一 「わたしのことば」の問題

前述のように、標準語政策は多面的に批判されており、その根幹には標準語や日本語の仮想的な規範性が横たわっている。これらの

論者には、個人に言語を取り戻したいという欲望があるようにも見える。前節での検討では、言語の規範性は拒否できないという結論に達したわけだが、さらに別の角度からも規範性について考えておきたい。標準語を批判する論者たちから、やはり問題のある提案がなされているからである。

これらの論者が考える、標準語を批判した先にあるものとは、いったい何なのだろうか。何をどう改善すれば、批判すべき現状を乗り越えたことになるのだろうか。ナシヨナリスティックな国語、抑圧装置かもしれない御上からの標準語を拒否した先に、私たちはどのようなことばを使うことになるのか。この点に関して、安田（一九九九）と川口・角田（二〇一〇）は奇しくも非常に似た結論に達している。少々長くなるが、両方の著書から引用しよう。

ただ一ついえるのは、「方言」というよりも「自分の言葉」を大切にすべきだ、ということだろう。「民族の言葉」でも「地域の言葉」でもない、「自分が話している言葉」である。そして、他の人の話す言葉にも真剣に耳を傾けるべきだろう。それが「自分の言葉」を話す権利を守るための義務である。「国語」でも「日本語」でも「方言」でもなく、「自分の言葉」ととらえること、もちろん、言語が話される場にさまざまな権力関係がからんでくることは避けられないし、本書でも「方言」の語り方を通観することと、そのことを主張してきたつもりである。それゆえにこそ、そうした状況を踏まえた上で、「自分の言葉」を各々が大切にすることがまずなされねばならないと思うのである。

(安田一九九九:三三五)

「自分のルーツ」「所属するためのふるさと」として「母語」を追求め、そのために「母語」を描き出し、「日本語」という言語統一体を想定していたのでは、固定した一つの「母語」という考え方から解放されることはあり得ません。「言語の境界」を越えるためには、「発掘し続けることのできる常に新しい土地」として、一人ひとりの「言語」を創造していくことが大切なのでしょう。一人ひとりの言語を創造しようとする努力こそが、「母語」という呪縛から解き放たれ、「言語の境界」を越えていく道を開くのだと思います。

その一人ひとりの言語が、もはや「日本語」とは呼べない、呼ぶとしたら一人ひとりの名前を入れるしかない「〇〇語」なのです。他者に開かれた、他者との相互作用によって変容していくその「〇〇語」は、だからこそ、常に新しいものであり続けるにちがいありません。(強調原文、川口・角田二〇一〇:一九三)

理想として語ろうとしていることは両者ともによく理解できる。確かに、安田の言うように、標準語や国語といった統一的な仮想体系を批判したところで、その批判が地域方言というサイズの小さい別の体系に落着いてしまつては、結局は同じ構図の縮小再生産にしかならないことは自明である。そうすると、守るべきは「標準語」や「方言」といった、仮想的な括りに取り込まれることのない「自

分の言葉」ということになる。また、川口・角田の言うように、標準語や日本語を語るときについて回る規範性自体が仮構であり、それ自体が抑圧装置として機能するため拒否するべきだという立場に立つと、行き着く先は個人名を入れるしかない「〇〇語」ということになる。デカルトのコギトよろしく、今、自分の話している言語の実在性は疑いようもなく、根源的な権利として認められなければならないということになる。ここでの「〇〇語」とは、社会言語学で一般的に使われる「個人語／イディオレクト」と呼ばれる概念とは異なっているはずである。個人語とは、あくまである言語の中で個人を特徴づける語彙や文法、発音として現れる、癖のようなものを含んだ変種を指す。ここで使われている「〇〇語」という言い方を成立させるためには、そもそも一つの言語の一変種であることを拒否しなければならない。換言するならば、標準語であれ方言であれ、そして個人語であれ、類型化に背く意志が「〇〇語」という言い方には含まれている。誰かの言語と同じにならないようにしなければ、「〇〇語」という、ある一個人に限定された言語の存在を主張することはできない。

当然のことだが、このような主張に対して湧き上がる疑問は、「果たして、そのような言語が存在するのか」ということである。そもそも言語というものはコミュニケーションの仲立ちとなるものであって、個人に閉ざされたものであれば媒体となることはできない。つまり、「共有」ということが前提となる。安田らの主張に即して疑問点を明らかにするならば、「自分の言葉」を話しながら「他の人の話す言葉」にも耳を傾けるとはどういう状態を指しているの

か理解できないということであり、「○○語」という個人に閉ざされた言語を話しておきながら他者に開かれているとはどういう状態なのか、想像すらできないということである。⁽¹⁴⁾ 自分の言葉が「自分のもの」なのであれば、少なくとも意味を伴う音声として他者に開かれているはずがない。同様に、他の人もその人個人に固有の言葉を使っているのであれば、それは私に何かを届けることなどできない。ある授業においてズルー語の音声を学生に聞かせたとき、彼らは「言語なのかもしれないが、何を言っているのか分からない」という反応を見せた。当然である。ズルー語という言語の存在を知らない人に音声を聞かせたところで、何も伝わるはずがない。同じ日本社会にあっても、それぞれの人が自分の言語（仮にAが日本語Aを話し、Bが日本語Bを話すとする）を話しているのであれば、そこで生じるのはズルー語を聞いた学生とまったく同じにならないことをええないはずである。そうでないならば、それは「わたしの言葉」などではなく、最初から「わたしたちの言葉」だった、ということに他ならない。⁽¹⁵⁾ 「わたしたちの」という形で共有されているからこそ開かれる可能性があるのであり、「彼（ら）の言語」であることが明らかであるとき、媒体としての可能性は閉ざされている。（この点は結論で検討する。）

そもそも、伝えたいことを「自分の言葉」に翻訳したり、他者の言葉の中に理解可能な意味を見出したりすることができるためには、何らかの要素が他者と共有されていなければならぬ。それは、より原始的な状態を想定するならば、同時に目撃しているある状況の描写・記述のために使われる音声であるかもしれないし（意

味の共通性を認めることができる）、音声と意味の連合、すなわち言語が記号たる所以の基本性質として、記号そのものが似ているということも考えられる。やはり、何らかの共通性が見出されるのであれば、その言葉は、私と彼の間に契約として存在する社会的実体でなければならない。そもそも、言語の始原的な成り立ちとして他者との共有という要素は必須であり、閉ざされた○○語などというものが成立する余地はないはずである。このような共有可能性を無視した言語の概念は、言語の本質を履き違えているのではないだろうか。標準語を捨て、個人の手に言語を取り戻そうとするあまり、言語としての機能を失う主張をしてしまっているように見える。

では、ここで述べた「共有」や「共通性」の正体とは何なのだろうか。言語が言語であるためには、何が他者と共有されなければならないのだろうか。最後に、私的言語の問題を通してこの問いに答えることにしよう。

三・二 私的言語の不可能性

前節では言語学的に「自分の言葉」や「○○語」の不可能性について論じた。この種の、想像しても実体を決して伴うことのない言語を私的言語と呼ぶことができる。存在しないものの名前ではあるが、存在しない一角獣を想像することができるように、私的言語も想像することはできる。哲学において、一定の歴史を刻んできた私的言語に関する論考だが、ここではワイトゲンシュタインによる私的言語批判を取り上げることにする。

ワイトゲンシュタインの『哲学探求』第二四三節から開始される

私的言語批判は、「自分の言葉」や「〇〇語」という発想を完全に打ち砕くものである。その議論を確認しておこう。

次のような場合を想像してみよう。わたくしは、ある種の感覚がくりかえし起ることについて、日記をつけたいと思っている。そのため、わたくしはその感覚を「E」なる記号に結びつけ、自分がその感覚をもった日には必ずこの記号をカレンダーに書きこむ。(中略)——しかし、この場合、わたくしにはその正しさについての基準などないのである。そこで、ひとは、わたくしにとっていつも正しいと思われることが正しいのだ、と言うかもしれない。そして、このことは、ここでは〈正しい〉ということについて語ることができない、ということではないのである。(二五八節)

「E」をある感覚の記号と呼ぶことに、どのような根拠があるのか。つまり、「感覚」というのは、われわれに共通の言語に含まれる語であって、わたくしだけに理解される言語の語ではない。それゆえ、この語の慣用は、すべての人が了解するような正当化を必要とする。(強調は原文、二六一節)

私にだけ分かる感覚に「E」という記号を与える。カレンダーの昨日の欄には「E」という書き込みがあり、今日の欄にも「E」という書き込みがある。もちろん、他人にはこのEという記号が意味することは分からない。私だけの感覚だからであり、「E」も私だけの言語だからである。では、このとき、カレンダーに書き込まれ

た二つの「E」が同じ二つの感覚を表している、同じルールにしたがって書かれた「E」という記号だということが、どうすればわたしに分かるだろうか。他人によつて検証することも訂正することもできない感覚とEの結びつきであるため、たとえEと他の感覚が結びついていても(他の感覚かどうか、本当は検証する術はないのだが)、私が規則にしたがっていると主張する限り、Eと呼び続けることは可能である。そうであれば、私にすら二つのEが同じであることを説明することはできなくなりそうである。ウィトゲンシュタインの説明そのまま、「ここでは〈正しい〉ということについて語ることができない」ということである。

野矢(二〇一・三〇六—三〇八)では、無人島にいるロビンソンが「魚を食べない」という誓いを立てる例が挙げられている。「例えば、ウツボをつかまえる。そして『これは魚じゃない、蛇だ。だから食べてもいいんだ』と判断して、食べる。誰も文句は言えない」。その調子で、どのような魚であつても釣り上げては食べることもできる。理由はどのようなものであつてもよく、理由はそもそもなくてもよい。自分で「これが正しい規則の適用だ」と信じる限り、誰にも口出しできない状況がそこにはある。つまり、「自分が信じていればいい」という絶対的な条件のもとでは、規則は骨抜きにならざるをえず、そもそも「規則にしたがっている」と「規則にしたがっているとと思っていること」の区別はできない。野矢の言う通り、自分一人にしか分からない規則であれば誰にも検証することはできず、本当に規則にしたがっていることと、したがっているとと思っているだけということの区別ができないのである。

結局のところ、「私的言語として持ち出された「E」は、何かを記述してはいない」(野矢二〇一一・三二〇)、と考えざるをえない。正しいか正しくないか、同じか同じではないかを知るためには、ウィトゲンシュタインに照らして言うならば「この語の慣用は、すべての人が了解するような正当化を必要とする」ということになり、野矢の言葉を借りるならば、「真偽を問うことができない、問うことに意味がないのであれば、それは記述とは言えない。私的言語「E」は、私的体験を記述してなどいない」(野矢二〇一一・三二〇)ということになる。

それは、私的言語が他者を完全に排除してしまったことの帰結である。私人では、それは言葉にならない。私にしか理解できない言葉は、私にも理解できないのである(野矢二〇一一・三二〇)

かくして、言語が言語として機能するためには、「誰にでも分かる」基準が必要となることが分かる。前節最後の問いに答えるのなら、共有されているのは規範ということになる。

かつての標準語の強制や、植民地において現地の言語を禁止し、宗主国の言語を押しつけるといった暴力的なことは批判されてしかるべきである。しかし、やはり言語が言語として機能するためには規則が共有されている必要があるというのは、避けられない原理だと言えることができる。そして、暴力的な歴史的経緯についても、規範性そのものに問題があるのではなく、規範の「強制」が問題なの

だと批判し続けることは可能である。国語の政治性や標準語の規範性を拒否した結果として想定されている「自分の言葉」や「〇〇語」だが、想像することしかできないのがこのような言語である。そこから自由でありたいと願っていた規範性に、最初から支配されているのが言語なのである。

三・三 誰のものでもない言語

このように考えてくると、最後に、言語の在り処もしくは所有者というものが問題となりそうである。先行研究の論者たちは国家から自らの手に言語を取り戻すという発想があるように思われるが、言語が言語であるためには、自らの手に取り戻すわけにはいかないというジレンマに陥ることになる。むしろ、望ましい形態ではないのかもしれないが、私的言語の可能性を検討してきて分かるのは、国家という単位の方が個人よりも言語が言語であるために必要な環境を整えてくれているという皮肉な結果である。

「自分の言葉」や「〇〇語」、あるいは『かれらの日本語』(安田二〇一一)、『日本語は誰のものか』(川口・角田二〇〇五)といった書名から窺い知ることができるのは、言語の所有者という発想である。言うまでもなく、「自分の」というときの「の」は「私の本」というときと同じ所有の意味を表しており、「〇〇」と「語」の間に「の」を挟んでも、言わんとするところに違いはないだろう。前節までの検討の結果、そもそも所有者を求めることなどできないのが言語だと言えることができる。社会において発生し、その社会に属している限り持ち得る幻想として「自分の言葉」や「彼らの言葉」

という言い方が可能だが、その社会がなくなれば言語もなくなってしまう。(言語だけがなくなることもあるが、それまでとは社会構造が変わってしまったことが前提となっているため、「それまでの」社会がなくなっているということもできるだろう。)占有することができず、社会において規範という形で共有されるしかないものであれば、そもそも所有者を求めるといった問いの立て方そのものが間違っている。

他者に開かれた新しい言語としての「〇〇語」は、他者に開かれている時点で、既に自分の手を少しだけ離れている。自分の言葉を大事にするために他者の言葉も大事にするという交換が可能であるためには、自分の言葉を他者も所有し、他者の言葉を自分も所有していることが前提となる。何よりも、「自分の言葉」は、他者に対して開かれているからこそ、自分にとってもアクセス可能なのである。

結論——絶えざる交渉としての言語

ここまでは、「自分の言葉」や「〇〇語」といった概念が私的言語を意味するものとして、そのようなものは存在できないという批判を行ってきた。最後に、これらの概念が私的言語以外の何かを意味することができるか検討した上で「自分の言葉」の代案を提示して、本論文を閉じることにしよう。

私的言語以外の可能性とは、他者に開かれた「〇〇語」や、他者の言葉も大事にしながら使う「自分の言葉」が、「わたしの」という所有者を明確にしておきながら、実は「わたしたちの」という範

囲に拡大されたものに過ぎないのではないのかということである。問いの形を変えるならば、一定範囲で自由に通用するものとしての「わたしたちの言葉」と、標準語や国語、日本語といった、人為的に作り出された言語の違いとは何なのだろうかという問いである。

この問いに対して、本論文は、規範の所在、あるいは、規範にアクセスする権利が違ふと答えたい。標準語であれ標準語が浸透する前の地域変種であれ、もしくは国語であれ日本語であれ、それが言語という体系をとっているのであれば、必然的に規範は必要である。言語の成立状況を考えてもそうであれば、私的言語の不可能性の検討を通して、やはり他者の話す内容の真偽が判断できるかどうかということが言語にとつて重要な要請であることは明らかである。いかに標準語政策を批判し、「自分の言葉」の重要性を訴えても、その自分のことばを理解してくれる誰かがいなければ、それはそもそも言語ではありえず、その言語を使っている本人にも意味が分からないという結果を引き起こす。言語を使っている本人の本能的な反応もしくは分節されていない感覚が何らかの音声と結びついたというだけで、言語の規則性や再現性を望むことはできない。その意味で、どのような小さな集団であっても言語に規範は必要であり、人が二人いれば、規範をめぐる攻防が展開されても不思議ではない。ただし、政治的・行政的な制度として定められた言語の場合と、「わたしたちの言葉」では、規範に対する権利が明確に異なっている。

標準語が明文化されておらず、規範を守ると同時に、規範を作る人として参加することができる社会を考えてみよう。人の

話し方に対して「そういうときには、こう言うべきだ」「このよう
なつもりで、この言い方を選んだのだ」と、相手を説得し、相手に
説得される次元にとどまることができる社会であり、そこでは
「こう言うべきだ」「これを意味するはずだ」というように、それぞ
れの人がゆるやかに共有された規範を参照しながら言語を使ってい
る。誤解や思い違い、言い間違いなどが日々生じることになるが、
それを正していくことができるのも、このゆるやかな規範に誰もが
アクセスできるからではないだろうか。

私的言語の批判においては、「何かを記述できるかどうか」とい
う点が問題であった。事実命題として真偽を問うことができるかど
うかという問題である。一方では、文法命題というものもある。た
とえば、「結局、誰も私の悲しみを分かってくれない」というよう
な台詞を吐く人がいる。事実の記述としては、この世界に一人でも
この発話者の悲しみを理解できる人がいれば偽となる命題だが、事
実の真偽はおそらく問題にならない。これは文法命題であり、「私
の悲しみを対象として『分かる』という言葉を使つてはならない」
という、「分かる」という語の使い方に關する命題である。⁽¹⁹⁾このよ
うな台詞を闇雲に使うのは平穩なコミュニケーションの障害になり
そうだが、それでも、ある語の使い方を自由に変更する権利を持っ
ているからこそ言える台詞であり、このような言明にしたがつて説
得されるかどうか、やはり聞き手の自由である。説得し、説得さ
れうる次元であるからこそ、誰もが手の届く範囲に規範があり、ま
た変更していくこともできる。

しかし、言語が標準化され、国が規範の全権を握ってしまうと、

言語使用者は規範にしたがうだけの人となる。説得し、説得される
次元から、正誤をただ判断される側に回ることになってしまう。こ
のような状況が抱える問題は、繰り返しになるが、方言がかつて駆
逐されていった教育現場や植民地での「国語」教育のことを考えれ
ば十分だろう。こう考えると、「標準語」や「日本語」、あるいは「国
語」といった概念自体が大きな危険性を孕んでいるわけではなさそ
うである。問題の核心は、規範性が言語使用者の手の届かないこ
ろに握られているかどうかということにある。権力者が規範を握
り、一般の人がただ規範にしたがうだけとなっているため、方言が
剥奪され、植民地の土着言語が奪われるということが起こってしま
うのである。原理的に、すべての人がまったく同一の規範を共有す
ることができないからこそ、ゆるやかな規範にそれぞれの人がアク
セスし、交渉するというプロセスが可能となり、また必要になるの
である。この意味では、川口・角田らの主張はまったく正しい。し
かし、向かうべき結論は「〇〇語」ではなく、主体的に共有された
規範性である。

したがって、本論文が最終的な提案として提案したいのは、決し
て「わたしのことば」ではなく、真の意味での共通語である。共通
語は、「標準語」という用語が持つ規範性の強さを嫌い、「全国で通
用する言語」として登場したものであるが、多くの論者が指摘して
いるように、少なくとも日本では標準語の単なる言い換えに過ぎな
い（小森・イなどでも批判されている）。実際、NHKや教科書な
どで登場するときには必ず「共通語」という用語が使われているが、
民法各局やその他の媒体で「標準語」という用語が禁止されている

わけでもなく、まったくの同義語として流通している。このような安易な言い換えではなく、それぞれの人が説得し、説得される次元にとどまり、規範を守りもするし変更もできる自由を手にした人間同士が作り上げていくものとしての言語を共通語と呼びたい。この言語は、ピジンなどに似たものだと考えてもらって差し支えない。そもそも異なる言語の間で発生するピジンと比べると、少なくとも同じ言語（と考えられているもの）を話す共同体内の中央変種と地域変種の間、ある個人と隣人の間ではあまり目立たないかもしれないが、生じていることは本質的に同じだからである。同じ日本語を話していると思ってもなかなか話が通じないといったこともある。本当は同じ言語ではなく、常に、それぞれの話者が自分の立場から規範にアクセスし、理解しあえる着地点を探して交渉しているからである。（形式と意味の結びつきが人によって違うこともあり、注十二に書いた通り、規範にすべてが書き込まれているわけでもない。）

標準語で作成された教科書によって全国共通の義務教育が行われるようになって既に非常に長い年月が過ぎ去った。メディアや交通網の発達などによって地域変種が廃れ、世代間での断絶が生じるほどに標準語は浸透している。さらに、文化庁による「国語に関する世論調査」（たとえば平成二十二年調査結果）において、「国語に関して国に期待すること」の一位が「家庭や社会で正しい言葉遣いが行われるようにする」ことであり、上位に「国語に対する意識が高まるようにする」（同二位）「敬語など言葉遣いの標準を決めて、その普及に努める」（同五位）となっているように、規範を国から

授かるという意識が一般の人の中に植え付けられてもいる。この地点から立ち上がるのは決して容易ではないが、真の共通語を目指すことこそ、平等に規範にアクセスするという意味で、個人の権利が取り戻されることではないだろうか。ただし、たった二人の間であつても、規範をめぐる絶え間のない交渉は続くことになり、また続けるべきだということでもある。ある意味では、非常に暴力的な側面が、ことばを使って何かを人に伝えるという行為には内在している。これは「言語が話される場にさまざまな権力関係がからんでくることは避けられない」という安田のことばそのままである。

標準語や国語といった概念や政策を批判するために仮想性や規範性を根拠とすることはできない。必要なのは、規範の全権を委ねてしまわないことであると同時に、言語の限界を知りながら他者を信頼し、共有を目指す姿勢である。真の共通語を得るためには、説得し、説得されるかもしれない危険な交渉を引き受けるだけの覚悟が求められるのである。

参考文献

- イ・ヨンスク (一九九六) 『国語という思想』 岩波書店
- 井上史雄 (二〇〇七) 『変わる方言、動く標準語』 ちくま新書
- 川口良・角田史幸 (二〇〇五) 『日本語は誰のものか』 吉川弘文館
- 川口良・角田史幸 (二〇一〇) 『国語』 という呪縛——国語から日本語へ、そして〇〇語へ』 吉川弘文館
- 小森陽一、イ・ヨンスク (一九九八) 『いまだない言語——日本語』 『現代思想』 八月、七八—九五頁
- 佐藤和之 (一九九六) 『方言主流社会——共生としての方言と標準語』 おうふう
- 柴田武 (一九五八) 『日本の方言』 岩波新書
- 鈴木敏和 (二〇〇〇) 『言語権の構造』 成文堂
- 滝浦真人 (二〇一二) 『日本語は親しさを伝えられるか』 岩波書店
- 陳培豊 (二〇一〇) 『同化』 の同床異夢——日本統治下台湾の国語教育史再考』 新装版、三元社
- 野矢茂樹 (二〇一一) 『語りえぬものを語る』 講談社
- 安田敏朗 (一九九九) 『〈国語〉と〈方言〉のあいだ——言語構築の政治学』 人文書院
- 安田敏朗 (二〇〇六) 『国語の近代史——帝国日本と国語学者たち』 中公新書
- 安田敏朗 (二〇一一) 『かれらの日本語——台湾「残留」日本語論』 人文書院
- de Saussure, Ferdinand. (1916) *Cours de Linguistique Générale*. Edition Payot & Rivages. Paris.
- Wittgenstein, Ludwig (1953) *Philosophische Untersuchungen*. (藤本隆志 訳 (一九七六) 『ウィットゲンシュタイン全集八 哲学探求』、大修館書店)

注

- (1) その他に、「撲滅」「記述・保護」「娯楽」という時期で方言の地位変遷を区切る見方もある(井上二〇〇七)。
- (2) 柳田国男が提唱した方言周圏論の影響もある。
- (3) たとえば、現在の標準的な形容詞の用法では名詞を修飾するときにはイを使つて「高い山」「赤い花」となる。通常の古文では「高き山」「赤き花」とキになるが、さらに上代にまで遡ると「高け山」「赤け花」となる。そして、まさにこのケによる名詞修飾が八丈方言に残っている形式であり、このような事例があるために、古語が方言に残ると考えられている。上代日本語が八丈島や青ヶ島に「残つて」いるのか、上代日本語とは関係なく、ただこれらの地で使われているだけなのかという議論も可能かもしれないが、一般的に古語と方言に共通性を見出すことができるのは確かである。この共通性の捉え方を指して「包摂」として批判することも確かに可能であり、比較言語学の手法を用いて日本語の起源に迫ろうとする研究に対する批判もある。しかし、比較言語学が備えた政治性に言語学者自身が無頓着であることを批判することが妥当かどうかは議論の余地があるだろう。これは、フランス語とイタリア語、スペイン語が「同系である」という、比較言語学的に事実だと考えられていることが、これらの言語の話者を抑圧しているのかという疑問と同じである。
- 筆者は、方言と古語の間に共通性があるのであれば、そこには古語が残っているという見方を事実として支持している。また、すべての比較言語学的研究が政治的に「日本語の一体性」を目標としているわけではなく、特に日本語については系統不明であるため、少しでも来歴を明らかにしたいという動機をもっていることがほとんどである。現在の方言記述と方言間対照研究などに批判的な目を向けることには賛同できない。

(4) 鈴木(二〇〇〇)によると、「言語権とは、自己もしくは自己の属する言語集団が、使用したいと望む言語を使用して、社会生活を営むことを、誰からも妨げられない権利である」(鈴木二〇〇〇:八)と定義されている。

(5) 日変種とし変種は社会状況によって自然に生じることが普通である。国の政策として明言しているケースは、筆者の知る限りではない。

(6) 方言の限定的な許容という見方は標準語化政策を推進した中心人物である上田万年の講演の中にも見られる。

(7) イ(一九九六)では標準語政策において保科孝一が果たした役割が詳しく論じられており、安田敏朗には上田万年、金田一京介、佐久間鼎、そして時枝誠記など、個別の学者が果たした役割と問題点を指摘する論考が豊富にある。

(8) 筆者にとってあまり重要な区別ではないが、社会的要素に基づいて変動する言語現象を分析するのが社会言語学(被説明項はあくまで言語現象)であり、言語を含んだ社会構造そのものを問題とする分野を言語社会学とする区別が一般的だと思われる。これは主として言語学者が立てた区別であり、イや安田自身は社会言語学者を名乗っている。何を主たる研究対象とするかという点が異なるわけだが、本論文には、ほとんど対話のないこれら二分野をつなぐという目的もある。

(9) たとえば安田(二〇〇六)では、青田節の『方言改良論』の一節が紹介され、青田が福島に教員として赴任する際、仙台の婦人と会話ができなかったシーンが描かれている。

(10) この時点では、東京に生まれ育ったからといって標準語話者というわけではないことに注意する必要がある。「現今の東京語が他日其名譽を享有すべき資格を供ふる者なりと確信す。た、し、東京語と

いへば或る一部の人は、直ちに東京の「ペランメー」言葉の様に思ふべけれども、決してさにあらず、予の云ふ東京語とは、教育ある東京人の話すことばと云ふ義なり」(標準語に就きて)と上田も明確に述べているように、東京の教養ある山手のことばが標準語の中心となったことは疑いようがないが、「一國の標準語とするには、今少し彫琢を要すべければなり」と、人工的に理想的な言語を作ることを標準化と捉えていることが分かる。

(11) ここで述べた問題は、実際にはより深刻な事態を引き起こす。言語の合成原理が機能しなくなるからである。詳細は割愛するが、たとえば「私は日本語を話す」の意味は「私」「日本語」「話す」に加えて、助詞の機能を組み合わせることで理解できる。合成原理が機能しない場合、一単語加えて「私は日本語とフランス語を話す」とするだけで、突如として《明日はスーパーとコンビニに寄る》ということの意味しうる。記号を組み合わせることでは文の意味が計算できなくなってしまうということである。すべての音が別々の意味を持つとは、このような合成性が破綻するだけではなく、同じ意味を二度と表すことができないという悲惨な状況を引き起こし、誰もが意味不明な音声を発し続けるしかないことになる。

(12) ここでは、決してラングが実在すると訴えているわけではない。筆者はむしろ、規範としてラングと呼ばれる体系があっても、それを個人の都合で勝手に変更することもまた自由であり、一見、同じように見えるパロールであっても個別に異なる意味を託すことができるのも確かだと考えている。「お腹が空いた」という文であっても、おそらく、潰瘍を患っている人が痛みを抑えるために何か胃にモノを入れたときの「お腹が空いた」と、晩御飯を控え目にした翌朝、爽快に目覚めた後の「お腹が空いた」ではまったく意味が違うはずである。しかし、そのような意味の違いはラングに属しておらず、

ただ言語使用者個人がどのような意図を抱え、ラングを超えた意味をどこまで伝えようとしているのかということに自覚的になり、さらに聞き手もその意図にどこまで寄り添えるかということにかかっている。言語によって意味を十全に発信し、理解することは非常に難しく、「言いたいことがうまく言えない、伝わらない」というもどかしさが発生するのは、言語自体の限界に、言語使用者がどこまで敏感でいられるかというセンスにかかっているからだと考えられる。もし、ラングのレベルですべてが規定され、形式と意味が共同体の中で完全に共有されているのであれば、もどかしさが発生する余地はなくなるはずである。幸か不幸か、十全な意味のやり取りが可能になり、誤解といったコミュニケーション上の問題も発生するはずがない。

(13) 繰り返しになるが、ラングは硬直したものではない。話者同士が認めあった規範に過ぎず、それ故、合意に基づいて変更することも自由である。場合によっては合意なしで、メタファーやアナロジーなどによって新規の意味を生み出すこともできる。言語の創造性を守るためには、硬直した規則としてラングを捉えてはならない。

(14) 川口・角田で述べられている「開かれた、新しいものとなるはずである」という部分には賛同できる。ただし、その根拠となるものは「○○語」というような存在しえないものによってではない。言語はそもそも恣意的であり、ラングや標準語のような体系として捉えられているものは、いつでも変更可能なものである。私には、みんなが「猫」と呼んでいる動物を、今日から「こね」と呼ぶ自由がある。同様に、他の人が「犬」と呼んでいる動物を「ぬい」と呼び始めても非難することはできない。ただ、コミュニケーションが閉ざされてしまうだけである。「開かれていて」というのは、後述するように「誰もが規範に従う側であり、作り出す側でもある」という

ことでなければならない。

(15) この部分に関して、査読者から「統語論・意味論の共通認識がある」と、知らない語彙でも（意味を）計算できる」という指摘を頂いた（「語い」を「語彙」に改め、「意味を」は筆者が補った）。査読者との対話が不可能であるため指摘の真意は測りかねるが、言語学の理論と意味の理解に関する興味深い指摘であるため、今後さらに検討してみたい。現時点での素朴な考えを述べておくならば、「統語論・意味論の理論を共通して知っている」ということと「ある言語の知識がある」ということはやはり別個の知識であり、「知らない語の意味が計算できる」ためには、「知らない語の意味を知っている理論のことにば翻訳する」というプロセスを経ているのではないかと考えている。本稿は規範を共有する必要性を主張するものであるため、翻訳によって共有知識を得るのであれば、本稿に対する直接的な反論にはならないように思われる。

(16) この議論については酒井智宏氏（跡見学園女子大学）との個人談話に多くを負っている。記してここに感謝したい。

【Abstract】

Dilemma between normativity and private language: Beyond the criticisms set against standard language

MORITA Takahiro*

The aim of this paper is to examine the adequacy of criticisms pitted against standard language policy. Although standard language is targeted for its normativity in the literature, language cannot function if norms do not exist. Private language, which sociolinguists rely upon contra the normativity of language, is also an imaginary product because it cannot be shared in a speech community. This paper claims that the normativity of language is not a theoretical construct, but an indispensable characteristic of language, and argues that problems which emerge from standard language policy can be settled insofar as the normativity of language is opened to all members of a speech community.

Keyword: standard language, sharing of language, normativity, theoretical language, private language

標準語政策を批判する論考では、標準語が備えた仮想性や規範性が批判の対象となり、規範性から逃れるために「自分の言葉」の重要性が主張されることがある。だが、方言であれ標準語であれ、どのようなレベルの言語であっても必ず規範性は必要であり、規範性のない言語は言語として機能することができない。また、「自分の言葉」のような私的言語は、そもそも規範性を排除することで成立している想像の産物であり、実在することができない。本論文は、言語学的にも哲学的にも、言語の規範性は言語学者が作り出した仮構などではなく、言語が言語であるための必須の特徴であることを示すことを目的とする。さらに、共通語を規範性が誰にでも開かれている言語として位置づけることで、標準語政策が招いた問題を解決することを提案する。

キーワード：標準語、規範性、言語の共有、仮想的言語、私的言語

* A lecturer in the Faculty of Economics, and a member of the Institute of Human Sciences at Toyo University